

## ニッポナリアと対外交渉史料の魅力 (25)

1812（文化九）年から始められ、十一人の日本人通詞を協力者として迎え入れています。しかし、この作業が軌道に乗り始めたころ、商館長としてのドゥーフに最大の危機が訪れるのです。

### ■ラッフルズの傀儡、出島に現れる

1813（文化十）年、彼の前任者で十年前に日本を去ったワルデナールと日本航路の知り尽くした船長ヘンドリック・フォールマンがイギリス船シャーロット号とマリア号に乗り込み、オランダ国旗を掲げて長崎へ入港したのです。これは、ジャワ島のオランダ根拠地を占領していたラッフルズがオランダ商館を支配下に置こうとして、日本に精通したオランダ人を派遣し、ドゥーフにその指揮下に入ることを求めて来たものでした。

この作戦は、江戸時代初頭にウイリアム・アダムス（三浦按針）などが尽力して作り上げていた対日貿易体制から、採算が取れないことを理由にして、1623（元和九）年に一方的に撤退したイギリスを、日本から持ち出される銀の価値に着目したラッフルズが、主権の消滅していたオランダを使って再び貿易ルートに乗せようと巧妙に練り上げたものでした。また、この計画は前商館長のオランダ人を使うなど、非情な方法を用いて冷徹に国益を追及しようとするものです。しかし、ナポレオンの戦略などにも見られるように、権謀術数を用いた外交交渉は、当時の国際関係、特に戦時下では半ば常套的に行われていました。

ドゥーフは突然、苦境に陥りましたが、ラッフルズに服従することを拒み、逆にイギリス船であることが日本人に知れるとフェートン号事件の報復があるものとワルデナールたちを脅しながら、五人の日本人通詞の協力を仰いでいます。通詞たちは国法を遵守しなければならない立場にありながら、全員がドゥーフに協力しています。彼らはドゥーフなくして新しい辞書の編纂が成り立たないことや、フェートン号事件の顛末も考慮した親蘭的な心境だったのではないのでしょうか。そして、二隻の船をオランダが雇ったアメリカ船とすれば問題はないことをドゥーフに提案しています。<sup>(1)</sup>

結局、ドゥーフはこの案を取り入れ、積み荷を買い取ってワルデナールたちを退去させました。ドゥーフは、事実が発覚すればオランダ人の処

罰や出島追放もあることから、ラッフルズとの正面からの対立を回避しながら、穏便にオランダの名誉と商館の立場を守ろうとしたのです。

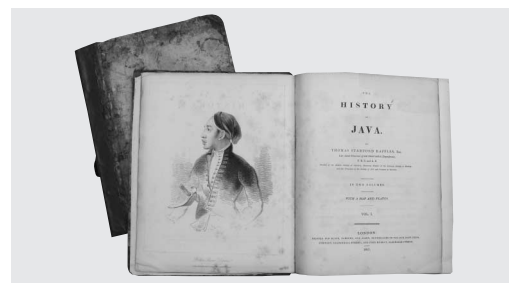
ジャワ島に戻ったワルデナールの報告に不満を抱いたラッフルズは、その翌年もシャーロット号を派遣して次期商館長となる人物を送ってきました。この時、ドゥーフはナポレオンの敗北によってヨーロッパで戦争が終わったことを知り、さらに巧妙にかつ柔軟にラッフルズの要求を退けています。従って、この間の出来事は長崎奉行所も江戸の幕府も知る由がなかったのです。

その後、1814（文化十一）年にオランダに主権が戻り、ジャワ島もオランダに返還されました。これに伴って、ラッフルズも副総督の地位を離れ、帰国の途につきました。そして、ドゥーフはこの時期に世界で唯一、出島の空だけに翻っていた母国オランダの国旗を見事に守り通したのです。

### ■知識人としての二人

ラッフルズの出島奪取計画は成功しなかったものの、彼の主務であるジャワの統治面では様々な知識を活用して大きな功績を挙げています。

特に、ラッフルズはジャワ島に赴任して以来、各地域に村落を設定するなど土地改革や行政改革を行い、当時としての近代的な統治体制を作り上げていました。彼はこの調査のため何度もこの島を視察して、行政面での施策遂行だけでなく付加価値となる情報を多方面にわたって収集しています。そして、帰国後の1817（文化十四）年に蓄積した知識をもとにしてロンドンで“The history of Java”を刊行しました。



“The history of Java” 2 vols. London, 1817.

（本学図書館所蔵）

本書の主題を見れば普通は歴史書と解釈しますが、内容は自然や文化から社会制度、さらには芸術などを幅広く盛り込んだもので、全二巻から成っています。このように、本書が民俗学